
超絶アルバイター リュウジ

尺取虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超絶アルバイター リユウジ

【Nコード】

N1700Z

【作者名】

尺取虫

【あらすじ】

多くの失敗を繰り返し、仕事を通して多くのことを学んでいくダメ大学生の成長物語。

フィルちゃんトリュウジ（前書き）

登場人物、団体は、実在しません。当たり前です。キリッ！

フィルちゃんとリュウジ

一人のイケテナイ学生が、大学の構内を雑誌を読みながら歩いていた。

隠すほどのことも無い。コイツは、大学2年生の鴨野龍司である。一応理系。粘菌の「フィザルム」なるものを飼育している生物学を専攻する学生だ。

雑誌の名前は、「これぞ、超絶アルバイト！」単なる、仕事探し専門のフリーペーパーである。

なぜ、アルバイトを探しているのか？
それは昨日のことだった。

鴨野龍司は、いつものように粘菌「フィザルム」のフィルちゃんに餌をあげようと押入れを開けた。そこには、オートミールの袋が大切に保管してある。

鼻歌を歌いながらいつものように袋をあける。

「ギャー！！　ね、ネズミだ！　わー！！」
そして、腰が抜けた。

そこには、大きなネズミが入っていた。それにしても驚きすぎである。仮にも、生物学専攻。ネズミと言うな。マウスと呼べ。

「フィルちゃんの餌が…。どうしよう。仕送りだけでは良質のオートミールが買えないし。」

「そうだ！支出が増えたら、収入を増やせばいいんだ！」

まあ、要するにだ。彼は、粘菌ベクトの餌のためにバイトをしようというのである。

さあ！ここで、解説しよう！

この世界では、バイトは全て、国の機関、「日本国バイト協会」によって管理されている。これは、日雇い派遣労働者の増加と、その反動による派遣業への規制が、ああなつて、こうなつて、うにゅうやになつてああ〜〜jggjはfじよ　というわけで、成立した団体なのだ。要するに、でっかい派遣業者だ。

そのバイト協会に登録しておくと、ランクに応じて仕事貰える。仕事の評価が高くと、ランクが上がる。因みに最低ランクはFランクだ。

あれ、リュウジが走りだしたぞ。どこに向かおうというのだ！

リュウジはGランク

リュウジは駆けた。おお、意外に速いじゃないか。そんなに急いでどこに行く。

ピロロロ…

ん。この音は携帯か？ 鞆の中か？

リュウジは立ち止まり携帯を開いた。

「はい。もしもし。鴨野ですが。」

「どうしたのですか？ 指定したお時間が過ぎていますよ。」

年配の女性の声とする。

「すみません。た、太陽の光が眩しくて。必ず向かいますので。」

おい。どんないい訳だ。なんでも太陽のせいになればいいってもんじゃないぞ。

「よくわからないけど、とにかく急いで来てくださいね。」

ガチャ

走れ、リュウジ。なんだかよくわからんが、走れ。遅刻だ！ 走れ！

リュウジは、汗でびしょぬれになりながら、たらたらと歩きながら雑居ビルのエレベーターに乗った。

「はあ、はあ。もう、ハシレナイ。」

この軟弱者め。草食系どころかプラナリア系とよばれちゃうぞ。」

エレベーターが停止した。

そして、扉が開いた。

そこには、「大日本バイト協会」の事務室があった。

「まず、遅刻はダメです。それに、謝罪の言葉も無い。これでは、失格です。」

年配のお局様風のいかにもキャリア積んでます！って感じの人がなんだか怒っている。

「う、ごめんなさい。もう、走れないくらい疲れてしまってますね。」

お、リュウジは意外と平気なようだ。

苦笑いの気持ちの悪い笑みを浮かべながらヘラヘラしている。

ここは謝り続けるべきではないだろうか。

「コラ！ アンタは何を考えているの！ その態度から改めなさい

「！」

怒られた。まあ、あたりまえか。最近の若いもんはダメだな〜ハハツ。

「う、ごめんなさい。」

「まず、私は、荻原と申します。あなたのジョブアドバイザーです。普段は、この事務所で仕事の割り振りや受付をしております。」

「ど、どうも。オレは、鴨野龍司です。」

「まず、当協会のシステムを紹介します。」

入会しますと、ジョブデータベースに登録され、各人にあつた仕事

紹介されます。もちろん、ご希望に添えない場合は断つても結構です。

時給はランクによって変動します。ランクはFクラスから始まりSクラス

まであります。入会時は、Fクラスからのスタートです。

ランクの決定は、アルバイト先の評価、経験、資格等によって変動します。

とはいっても、アルバイト先の評価×現場の回数でほとんど決まります。

それから、会社から会員へ支払われる報奨金の4割は、当協会が徴収します。

それで、リュウジさんはアルバイトがしたいということでしたけど、

どんなアルバイトがご希望ですか??」

「ぶっちゃけよくわかんないんで。楽な奴があればいいです。

あゝあと、労働中の事故とか補償されんですか?

物とか壊して弁償しろ!なんて言われても、オレ、払えないですよ。」

おい。リュウジ。その受け答えはどうかと思うぞ。また、怒られるんじゃない…」

「リュウジさん。まず、仕事はこちらで割り振るということだと思いますね。」

当協会で徴収するお金には、保険料が含まれています。ご安心してくださいね。」

あれ、怒らないのか…。

「では、バイト協会により、バイトマン腕時計が支給されますので、それを差し上げますね。」

「へー。これがバイトマン腕時計ですか。なんかちゃっちいですね。」

うむ。確かに普通の百円で売ってるような黒いビニールの腕時計だ。

「まあ、着けてみてください。」

「では。」

リュウジはバイトマン腕時計を左手首に装着した。

時計のデジタル画面の背景に「G」の赤い文字が浮かびあがった。

「なんですか？これは。すごいですね。」

「その文字が、君の今のランクです。」

「え。んあ。もう一度言ってくれませんか？」

「その文字が、君の今のランクです。」

あなたは、Gランク。」

「あ、あれ。Fランクが最低じゃないの？」

「あなたは遅刻もしたし、態度が最低です。」

とても現場に送り出せません。Gランクはそういう人のためのランクです。」

ほぼ、そんなランクがあるのか。良かったなリュウジ。レアだぞ。それは。

「因みにGランクの下は登録抹消です。これ以上ランクを落さないように

頑張ってくださいね。」

頑張れリュウジ！負けるなリュウジ！仕事はもらえるのか！リュウジ！

リュウジはGランク（後書き）

次は初バイトに向かいます。どんな仕事が待っているのか。ドキドキ。ワクワク。

初仕事だ！リュウジ！

時は、5月の連休前。

リュウジは、一人、携帯をジッと見つめていた。そんなに見つめても何もおきないぞ。リュウジ。

バイト協会に登録したものの、待てど暮らせど仕事の連絡はなかった。

そして、2週間が経ってしまった。

「ヤバイ。これでは可愛い粘菌達を養えなくなってしまう。…もう自分の食費を削るしかないのか。」

リュウジはゲームもしないし、漫画も買わない。ネットも家ではない。現代では非常に珍しい青年である。その生活は非常に「清貧」に分類されることだろう。粘菌へ餌代を除いて。

「あああ、早くバイトしないと」

そう叫んで頭を掻き篁り、机に突っ伏した。

ピロロロ…

その時、携帯電話の音が鳴り響いた！！

「っ… あわ、もし、もし、鴨野隆司です。」

「『もしもし』じゃないわよ。もっとハキハキ『はい！鴨野です』って言いなさい。…まあ、いいわ。今日は仕事をあなたに割り振ろうと思って電話しました。」

「え、仕事ですか？やったあ！いつです？どんな仕事です？」

「ちょっと落ち着いて。あなたにもできそうな簡単なお仕事よ。日給で6500円。モデルルームの看板持ちです。ゴールデンウィークの初日ね。空いてます？」

「もちろん空いてますよ」場所はどこです？いやあ…うっれいなく」

「じゃあ、お仕事入れるわよ。詳細はメールでお知らせするので、時刻と場所はそれで確認してください。それじゃあ、頑張ってるね。期待してないけど。」

「はい。頑張ります。それじゃ。」

ピッ。リュウジは、携帯電話の通話を切った。

「ヤッホーい。仕事だ！」

5月の穏やかな風に吹かれながらリュウジは自転車を走らせた。

乗客の少ないバスに乗り、隣町の穏やかな住宅街に向かう。

もちろん、遅刻しないよう、トラブルがあってもいいように、仕事開始時刻の30分前に現場に着くバスに乗っている。前回、事務所に行くのに遅刻しちゃったからね。

よし、今日のオレ。気合入っているぞ！

「おはようすつ。… あゝね。誰もいないな。」

オドオド

「おはよう。君が今日のバイト君か。いろいろ準備があるからちょっと待っててくれないか。」

モデルルームの社員さんが話しかけてきた。どうやら、この人がお客さん（依頼人）らしい。まあ、優しそうな30歳くらいの青年だ。休日なのに頑張ってるな。

「はい。」

「じゃあ、あのイスに座って、この看板を持って、ずっと座っていてくれないか。」

「看板持つてるだけですか？それだけ？旗とか振るとか……」

「いや。余計なことをしないでいいよ。看板は法律上、だれかが持つてないといけないんだ。漫画でも読みながら看板支えていればいいよ。楽だろ。トイレはそこにあるから。じゃあ、宜しく」

リュウジはキョトンとしていた。こんな楽な仕事。…これでいいんだろうか。

森をぼろと見つめるリュウジ

目の前は森だ。リュウジは、大きな道路の前で、看板持ちをしている。

大きな道路だが、車はあんまり通らない。

人通りも多くない。こんなところで看板持つて何の意味があるのか。

「でも、お金は確実に入っている。一時間で、チャリーン。二時間で、チャリーン」

リュウジは、漫画を持ってきた。音楽を聴くことはできたのだが、仕事中にMP3プレイヤーを取り出して耳に嵌めるのは、何だか気が引けた。だから、真面目にじっと目の前の新緑に満ちた森を見つめていた。

なんでこんなことをしてるんだろう。お金は確かに入る。でもなんだか、空しい。オレは看板持つてただけだ。ほんとにそれだけだ。そんなことを考えていたら、時間が過ぎてしまった。

「おい。バイト君。そろそろお昼だ。昼ごはんはこっちで食べなさい。」

看板はそのへんに寝かせておいて。」

モデルルームの裏。仮設のテントの中で、ひんやりとしたパイプイ

スに座り、コンビニで買った冷たいおにぎりを無心で食べる。

「よっこしょ。っと」

水道の工事をしていたおっさんが横に座った。

「大学生か。」

急におっさんが話しかけてきた。

「ふあい。…ゴクン 大学生です。」

おっさんは、少し下も向いて呟く。

「おめえ、Gランクか…。」

リュウジは狼狽した。

「な、な、あんでそれを！」

「その時計にちゃんと表示されてるぞ。」

おっさんが指した先には、バイトマン腕時計があった。

「そ、っかゝGランクなんですよ。恥ずかしい限りです。ハハハ。」

「最低のGランクだから心配になって、お前さんの働きぶりを仕事の合間にちらっと見せてもらったが、真面目じゃないか。よう。漫画も読まず、音楽も聴かず。眠りもしないで。」

「…。いや。ただ、くそ真面目なだけですよ。」

「おめえのいるべきランクは、Gランクなんかじゃねえ。大事なのは真面目さだけだ。真面目に仕事しているおめえが、こんなところにいちゃいけねえよ。」

「そ、そうですか。」

「おつと。俺もこんなところで油売ってたら、仕事が遅れちまう。さあ、しごとしごと！」

そう、言うとおっさんは弁当を口に流し込み、足早に工事現場に戻っていった。

「何が、いいたかったんだよ」

リュウジは、そう呟いた。

午後からは最悪だった。午前中の好天気が嘘のように天候が悪化し、激しい雨が降ってきたのだ。

モデルルームの兄ちゃんに合羽を貸してもらい、縮こまりながら看板をもった。こうなると、堪えるのが仕事のようにだ。

「… さ、寒いよう。さむうつ。」

5月といえども雨は冷たい。その寒さで体が震えた。

「作業終わりました」

そっついながら、リュウジはモデルルームの兄ちゃんのところ合羽を持っていった。

「作業？… ああ、看板持ちね。」

若干、侮蔑の表情が見えた気がしたが。まあ、作業と呼べんな。

「合羽はそこに置いといて。じゃあ。もう、帰っていいから。おつかれさん。雨だし、評価はちょっと高めに申告しとくよ。お疲れ様！」

「評価？」

「あれ、聞いてないの？現場の担当者は、バイト君の評価をバイト協会に送っているんだよ。」

「あ、そっついえば荻原さんがそんなこと言っていたような。」

「はい。じゃあ、お疲れ」

「お疲れ様です。」

濡れた体を震わせながら、帰り道、リュウジは考えた。

評価。ランク。お金。自分。仕事。評価。ランク。お金。仕事。自分。
分。場所。

引越し屋に初トライだ！リュウジ！

リュウジは、初バイト（住宅展示場の看板持ち）というミッションをクリアした。初バイトを通して自分を見つめなおしてもいるようだ。少しだけ、リュウジが強くなったようにも見える。さて、今回はどんな仕事をするのか。いや、仕事をもらえるのか？リュウジ！

5月の連休の2日目。お昼ごはんを食べ終わったりリュウジは、1月から出しっぱなしのコタツ（布団付き）に入ってぬくぬくしながら分子生物学の勉強をしていた。まさに、学生としての最大の喜びを満喫していたのだ！

そこに、一本の電話がかかってきた。

ピピピッ！

「はい。こちらは鴨野龍司です。お掛けになった…」

「もう！ふざけないで！ ランクさげちゃうわよ！」

この声は、バイト協会のおばちゃん。荻原さんだ。

「それは嫌ですね。それで、今日はなんです？」

「はい。忙しいから手短に言っね。明日で急なんだけど、他の現

場で欠員がでたの。引越しの現場なんだけど。なかなか引き受けてくれる人がなくて。ほんとは、Eランク以上のお仕事なんだけれど、鴨野さんに頼みたいの。どう。明日、予定はある？」

「引越しですか？オレ、体力ないっすよ。部活も粘菌部だし。」

「そう。でもね。一度やってみたらいいと思うわ。そうだ。引き受けてくれたら、ランクアップしてあげる。前回、好評価だったし。Fランクに戻してあげる。今回の現場で、好評価ならEランクにしてもいいわ。やってみない？」

その時、リュウジの頭の中には、前回のバイトであった水道工事のおっさんの顔が浮かんだ。そういえば、真面目だとか褒めてたなあ。Gランクにいてはダメだとも言ってたなあ。

「そうですね。一回やってみます。」

「じゃあ、Fランクにするね。ランクアップおめでとう。詳細はメールで送るから、よく見といてね。朝早いから、遅刻は絶対にしないように。じゃあね。」

上機嫌になった荻原さんはそう言って電話をきった。

明日は、初の引越しの現場が大変な日になりそうだ！！

次回。リュウジは引越し現場に向かう。

プラナリア系男子リュウジはガテン系の仕事ができるのか!? リュウジ絶対絶命!

現場に向かうぜ！リュウジ！

まだ暗い、朝4時にリュウジは目を覚ました。まだ、夜中の音がある。静まりかえっていて、全てが朝を待っているかのようだ。もそもそ。眠いが、頑張つて布団から這い出る。

30分かけて着替えと歯磨きをして、身を整える。いつもはこんなキザなことしないよ。いや、これは荻原さんの指示なわけです。オレは自然主義者だから、ボサボサが至上だと思ってる。こんなキザなまねは信条に反するのだ。

だが、前回、初バイトして思ったんだが、人に与える印象って結構大事かもしれない。今日は、ちよつとデキル男みたいな風に、近づきたい気分。いや、ちよつとダケダヨ！

忘れ物が無いか、指差し確認。サイフよし！、タオルよし！携帯よし！

これも、荻原さんの指示です。はい……。遠足に行く前の子供みたい。まあ、忘れ物しちゃあだめだしね。おっと、粘菌大百科だけはもつていかなきゃ。

リュウジは、集合場所に30分前に着くように、玄関を出た。

まだ、5時前だ。人はだれもいない。ライトをつけた自転車を漕い

で近くの駅までレッツゴー！

郊外の田舎の駅まで一時間程電車で移動。っていうか、現場に近い人をまわせばいいのに。

田んぼの中の駅で、下車。朝の田園って気持ちいい〜。で。ここであってんのかな。オドオド。

「おはようございます。今から点呼をとります！」

今日のメンバーはどうやら5人らしい。集合時間5分位前に全員集まった。どうやらオレは早く来すぎたらしい。なんだか、みんな慣れていて頼もしいな〜

「鴨野龍司さん。ああ、いるね。初めてだよね。それから、荻原さんから制服のプレゼントだって。はい、コレ。渡すように頼まれていたんだよ。よし！じゃあ、行きますか！」

制服のプレゼントか。もしかして。ツンデレ？

あ、そういえば、どこに行くのかちゃんと教えてもらってないな〜

「す、すいません。現場ってどこですか。遠いんですか？」

点呼をとっていた、リーダーの風格漂うロンゲのお兄さんは答える。

「ああ、そうだ、初めてだよ。引越し屋さんの事業所に行くんだよ。そこで、トラックに乗り込む。みんなバラバラの現場になると思うよ。んゝ会社の人2人、バイト1人で作業することが多いかな」

「ちよつとイメージ沸かないっすね。」

「まあ、行けばわかるよゝ。帰りはバラバラだから、作業が終わったら荻原さんに電話してね。」

事業所に着いたら、ボロシャツ制服を着て、その上に引越し屋さんの制服を「オン！」する。ちよ、ちよつと暑いかもです。

そうして、駐車場にオレ達バイトは、一列に並んだ。

トラックの運転手（引越し屋の社員）さん達が次々に来る。そして、「君、こつち」と、手招きする。

1人消え。 2人消え。 3人消え。 4人消え。

どんだん現場に皆連れられていく。

なんだか、顔つきを見ているような気がするが…

こうしてリュウジは、駐車場にポツンと一人残された。。。。ガーン

現場に向かうぜ！リュウジ！（後書き）

現場に行くまでのお話で、一話書いてしまった。これだけでは、内容が無い。次回こそ、感動を届けたい。ような気がする。

1階と4階の間

ここまでのあらすじ。

リュウジは粘菌の餌代を稼ぐため、日本バイト協会に登録しアルバイトをはじめた。最初は、首寸前のGランク。初のバイトで住宅展示場の看板持ちをやり遂げた。次に指示された現場は、引越し屋の補助だった。現場に着いたまでは良かったが、ポツンと駐車場に置き去りにされるのだった。

朝の駐車場に取り残されたリュウジは、一人立っていた。どうしよう。オドオド。事務所に戻って声掛けてみるか…

「き、きみっ！ こっち、こっち」

でました！手招きする救世主！っていうのは言いすぎか。社員の人が何だか手招きしているよ。

「このトラックにさあ、乗って。時間無いから！」

大きなトラックの狭い座席に座る。へーこんな風になってんだ。結構せまっくるしいんだなあ。っていうか物を置きすぎじゃないか？

今日一緒に仕事するのは、この2人でゝす。

まず、こっちの運転席にいる50代くらいの細身の小さなおっさん。優しそうかも。っていうかこの体で、引越し屋なのか。よく、勤まるなゝ

そして、地図を見てる30歳くらいの眼鏡かけた人が、さっき手招きしていた社員さん。うーん。引越し屋の「ガテン系」のイメージと違うかも。こっちの人は筋肉はついているが…

はい。実は、今、ぶつちやけ「暇」です。現場に着くのに、あと30分はかかるという。

朝早いのも合点がいくね。

さあ、つくかなゝつくかなゝ

… この頃はまだリュウジはわかっていなかった。何もかも。

現場に着くとまず、お客さんと社員さんが話す。いろいろと説明する。部屋の傷とかの確認する。ちゃんとしてるんだなあ。

そして、荷造りをする。トラックの中には、布団やらハンガー掛けやら、ダンボールやら、梱包道具が揃っている。それを使って荷造りをするのだ。

「おい！バイト君！ 衣類をこの箱に詰め込んで！終わったら声掛けて！」

「はい。」

「ばかやろう！返事は延ばすな！ハイッ！って言え！」

「ハイッ！すいません。」

いきなり怒られてしまった。前途多難だ。

階段の踊り場で、リュウジは佇んでいた。べ、別にサボっているわけじゃないよ！

階段を猛スピードでメガネの方の社員さんが、ダンボールを持って

駆け下りてくる！

「ハイッ！！」

大きな声を出し、ダンボール箱が手渡される！

「ハイッ！」

受け取ったら返事をして、トラックまで猛ダッシュする。

そして、渡したら、階段を駆け上がり、元の場所に戻る！

ダッ。ドタドタドタ。ダッ。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

はつきり言って息つく暇もない。走る。走る。走る。

こんなに走ったことはないという位、走る。

2段重ねなんてバイト2回目のオレにはむりだよ〜

そうこうしているうちに、荷物の波は去った。

それにしても、ダンボール多いなあつ。

社員の人2人が、冷蔵庫と洗濯機を運び出し、完了！

（その間、リュウジは梱包資材の片付けを命じられた）

「やっとく終わりだ！ーさあ、帰るぞ！ー」

「何を言ってるんだ。まだ、一件目の荷物を積んだだけだぞ。」

「えっ…」

苦笑いされているよ。どうしよう

1階と4階の間（後書き）

次こそ、意味のあるものにしたいと思うのだが、、
余分な描写に費やす部分が多くて、どうにもこつにも本題に入れな
い。

うつつ。この分だと、どうなることやら…

引越し屋 完了！

引越しは、2件目に突入し、昼食後も3件目と続いた。リュウジの首に掛けたタオルは、もう汗でびっしょりだ。3件目の荷物をトラックに積み込んだ頃には、日が落ちて真っ暗になっていた。

「バイト君。これで最期だから。」

「ハイ！」

「エレベーターがあるから、台車を使おう。」

「絶対に、落すなよ！ エレベーターの出口でいいからな！」

「ハイ！」

リュウジは手間取っていた。なかなか思ったように台車が動かないからである。

「あ、あれ、台車ちゃん。どこいったの？あ、あれ？」

もう、何分も台車に弄ばれている。ヤバイ。リュウジ、大丈夫か？

「おい！コラッ！何やってんだ！さっさと持って来い！」

眼鏡の方の社員さんが怒鳴る。

「い、いや。台車が上手く動かなくてですね。」

「ば、ばかつ！それ、反対だ。台車には向きがあるんだよっ！」

「え、そうなのっ。あ、わっわわああ〜」

積荷のダンボールとともに、リュウジは大きく倒れた。

「こ、この！しっかりやれよ！」

必死で、崩れたダンボールの山を積みなおすリュウジ。

そのリュウジを足で蹴っ飛ばす。

「ひっ、ひいい〜」

「また崩れるだろ！こんな積み方じゃ！交代だ！ここまで運んでくるから玄関まで運べ！」

リュウジは落ち込んでいた。こんな簡単なことができないなんて、

そんなバカ呼ばわりされたり、足蹴にされたり、自分に対する怒り、眼鏡の社員さんに対する怒り（逆切れ）で、「わああ〜」って叫びながら飛び出したい気分だった。

トラックの陰でうな垂れて座り込んでいるリュウジに、小さい、年配の方の社員さんが話掛けた。

「まあ、気にするな。初めてなら頑張った方だ。」

慰めているようだ。リュウジは顔を上げた。目が真っ赤だ。泣いていたのだろうか。

「オレ、今日、何にもできませんでした。怒られてはつかでした。トラックを誘導する時も、「声が小さいっ！」って怒られたし、挨拶も起こられたし、荷物の梱包ができてなくて怒られたし、最後の最後にコレですよ。もう、笑ってしまいますよね。」

「誰でも、そんなもんだ。初めから何でもできる奴はいないよ。」

「で、でもっ！ おじさんは冷蔵庫でも一人で持つし、梱包だって凄く早いじゃないですかっ！オレ、そんな力もないし、手先も不器用だから…」

「いいこと教えてやろう。わしの体格はいいほうか？寧ろ、小さい方だし、筋力だって、ほら見てみる、そんなにムキムキしてないだろ。でも、冷蔵庫が持てる。なんでかわかるか？」

「そ、そうですね。不思議ですね。」
リュウジは怪訝な顔をして答えた。

「荷物には、持ち方のコツがあるのさ。ダンボールなら、こう持つ。長い、例えば物干し竿なら、重心のあたりを抱えるようにして、こう持つ。その動作、動作に、動き方のポイントがある。それを、しつかりできれば、こういう仕事も筋力とか関係なくできるようになる。逆に筋肉に頼りすぎると、腰がやられたりして、わしぐらいの年齢で引退することになる。」

「へー。そういうもんなんですか！今度やってみます！」

「うん。特に、手や腕、腰は酷使せず、足で動くことが大事なんだ。そうすれば、多少重くても運べる。梱包の方は、あらかじめ準備を全て済ませてから機械的に、サッサッと終わらせれば早くできる。まあ、こういうのはコツだよ。一緒に働いている人をじっとみて、動きを真似するんだ。」

「観察して、動きを真似るんですか。」

「ああ、そうだ。そうしていれば、きっとできるようになる。」

作業が終了したのは、夜の9時だった。しかも、遠くの町で降ろされてそこから自力で帰りなさいと言われてしまった。酷い！

「鴨野龍司ですけれど、今、現場、上がりました。」

「お疲れ様。リュウジ君ね。今日は急なお仕事ありがとう。上手くできたみたいね。評価も上々だったわ。特別にEランクにしてあげる。」

「え、評価良かったんですか？ いっぱい怒られたし。蹴られるくらい。。」

「そう？ でも、比較的良好い評価になってるわよ。とりあえず、Eランク昇格おめでとう。」

「はい。ありがとうございます。ちょっとお聞きしたいんですが、よくわからない場所で、トラックを降ろされちゃったんですが、どうやって帰ればいいんでしょう？ ここがどこだかもわからないんです。」

「大丈夫よ。交通費は出るから。大人なんだから、頑張つて帰つてね。交通費は、後で事務所で請求できるから、じゃあねっ」

「うー。ココハドコ？？ど、どうしよう。」

暗闇に閉ざされた町で、一人佇むリュウジだった。

引越し屋 完了！（後書き）

なかなか話が進まない。まあ、いつものこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1700z/>

超絶アルバイター リュウジ

2011年12月25日17時50分発行